

認知症に優しいサインに関する研究

—病院環境に適したピクトグラムの開発—

鮑 柯含

A Study on Dementia-Friendly Signage:
Development of Pictograms in Hospital Settings

Kehan BAO

要約：本研究では、病院環境における認知症にやさしいサイン開発の一環として、認知症の人が理解しやすいピクトグラムのポイントを検討する。認知症高齢者（15名）および一般高齢者（5名）、医療・介護施設の職員（55名）に対するヒアリング調査から、認知症にやさしいピクトグラムのポイントを5つ（シンプルで表現が細かすぎないこと、大きく線がはっきりしていること、日常的に見慣れていること、位置関係がわかること、洗練されデザイン性があること）、避けるべきポイント4つ（情報量が多いこと、別の物に誤解されやすい形状であること、固定概念が強すぎるもの、感情的に不安があるもの）を抽出した。本研究を踏まえて、今後継続的に開発と研究を繰り返し、認知症に優しいサインの標準化および普及を目指していく。

Abstract : As part of the development of dementia-friendly signs in hospital environments, the purpose of this study was to summarize the key points of pictograms that are easy for people with dementia to understand. Based on interviews with elderly people with dementia (n=15), elderly people (n=5), and staffs who work in medical or care facilities (n=55), we identified five key points for dementia-friendly pictograms (simple and not too detailed, large and clear lines, familiarity in daily environments, showing positional relationships, sophisticated and well designed), and four points which should be avoided (too much information, symbols which may be mistaken for other objects, too stereotyped, or emotionally unsettling). Based on this study, we aim to standardize and disseminate dementia-friendly signs through continuous development and research in the future.

1. はじめに

WHO（2021）によると、2019年の認知症有病者は全世界で5,520万人と推定されている。また、今後数十年間に年齢別の有病率が変化しないと仮

定した場合、国連の人口予測をベースに換算すると、2030年に約7,800万人、2050年には約1億3,900万人に上るとされる。

日本国内においても、認知症高齢者の増加が見

込まれている。中堀ら(2021)は、「富山県認知症高齢者実態調査」を用いて、認知症の将来の有病率を推計した。その結果、2030年には日本全国で20%以上、2035年までに42都道府県において25%以上になると算出された。つまり、日本では今後15年以内に、ほぼ4人に1人が認知症を有することになる。

多くの人が認知症を抱えながら生活することが当たり前になり、認知症の人を支え・共に生活していく社会が求められるだろう。こうした中、国家戦略として認知症政策に取り組む国が増えている。イギリス政府は、2009年に「認知症とともに良き生活を送る：認知症国家戦略」(Living well with dementia : A national Dementia Strategy)を発表した。日本においては、平成24年にオレンジプランが発表され、さらに平成27年に「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～(新オレンジプラン)」が公表された。新オレンジプランでは7つの柱の1つとして、「生活しやすい環境(ハード面)」を整備し、認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりを推進することが挙げられている。

認知症の人がスーパー、病院、公共交通機関、図書館などの施設を利用するにあたって、施設内・施設間での移動が障壁となる。認知症の中核症状の1つに記憶力の低下があり、通い慣れた場所でも道がわからなくなるという事態が発生しうる。そのため、不安を感じて外出できなくなる人もいれば、出かけても帰り道がわからなくなり迷子になる人も多い。2017年に届け出があった行方不明者のうち、認知症と診断された人、あるいは認知症疑いのある人は15,863人であった。認知症の人が、記憶に頼らなくても行きたい場所を見つけやすくなるような工夫が求められる。その工夫の1つに、サインの活用がある。

サインのデザインのあり方については、国内外

で研究が進んでいる。

Barker & Fraser (2000)は、サインをデザインする際に、留意すべき4つの原則を以下のように説明している。

1. サインは、本当に必要なときにのみ使用すること。
2. サインの設置場所は、建物設計プロセスの一部として考えること。
3. サインのメッセージは短く、シンプルでわかりやすいこと。
4. 決められた書体、色、コントラストを使用して、デザインに統一性を持たせること。

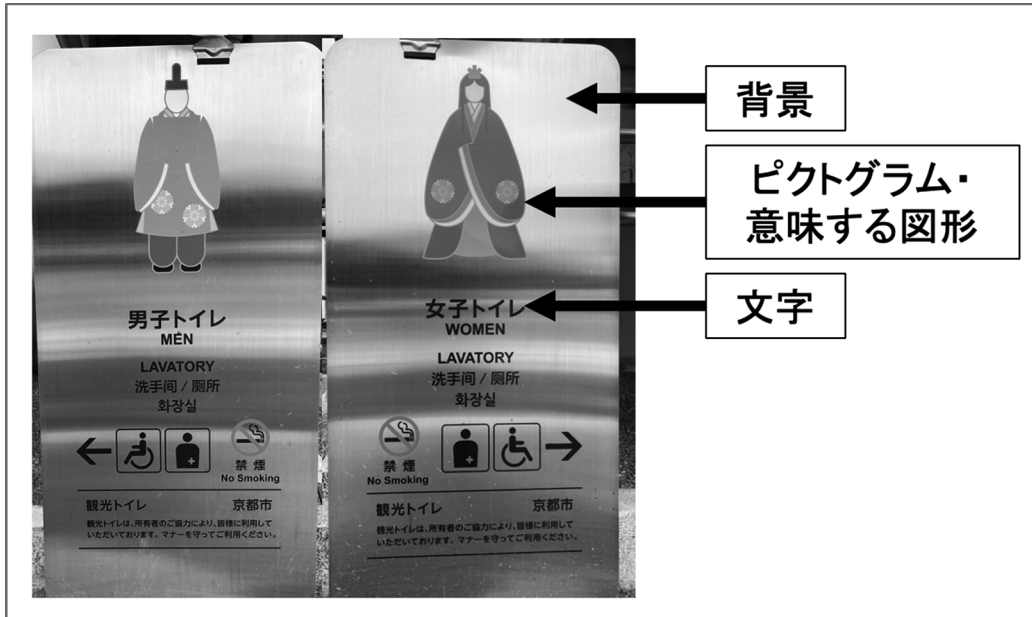
一方、福岡市が刊行する「認知症の人にもやさしいデザインの手引き」によると、読みやすくわかりやすいサインは、以下の4つのポイントを満たすとされている。

1. 文字とピクトグラムを併記すること。
2. 適切なサイズを設定すること。
3. コントラストをつけること。
4. 使い慣れた言葉で表示すること。

図1のように、トイレを示すサインを例とすると、背景・ピクトグラム(意味する図形)・文字の3つの構成要素がある。以上の研究では、いずれもその3つの構成要素が揃うこと、サイズや文字表現を工夫することなどについて言及している。

ピクトグラムや絵などの図形を使用することで、認知症がより認識しやすいことが証明されている。認知症高齢者は、文字情報の理解力が低下していることが多いが、ピクトグラムを使えば場所や物事に対する認識の手がかりとすることができる。絵は単語よりも多くの知覚情報を関連付けられるため、認識と記憶の相互作用を高めることができる(Finkら,2012)。ただし、ピクトグラムや絵などについてのデザイン原則は厳密には判明されていない。

図1 サインの要素



(写真出所：京都市東寺にて筆者撮影)

ピクトグラムの歴史は言うまでもなく、1964年の東京オリンピックに遡る。グラフィックを通して、言葉の制限を超え、選手や観客、多くの人に本質的な意味を伝えることができた。2021年に開催された東京オリンピックでも、再びピクトグラムが注目された。年齢、性別、文化的背景、言語に対して配慮をし、不慣れな国にあっても利用しやすい環境を提供できる点において、ユニバーサルデザインの一つといえる。ただし、現在、至る所でピクトグラムが活用されているが、認知症の人に特化したものはまだなく、どのようなデザイン原則が適切なのか解明しきれていない状況である。

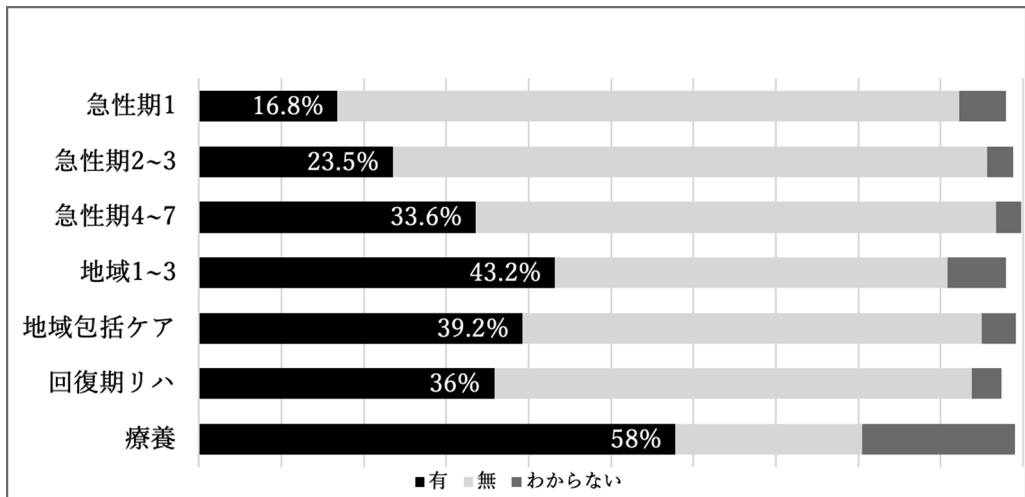
また、本研究の対象とする医療機関は、不特定多数の人が利用する前提ではあるが、高齢者患者の割合が高い。そして、加齢に伴い認知症の保有率が高くなり、以下図2のように、入院患者の多くは認知症患者である。そのため、病院の中で認知症の人に適した環境整備が必要になる。認知症

にやさしいサインの設置は、欠かせない1つである。

本研究は、日本における認知症にやさしいデザイン開発の一環として、サインの要素であるピクトグラムに焦点を当てることとする。認知症の人でもわかりやすいサインを設置することによって、認知症の人が安心して外出できる環境を整備することは、日本が認知症共生社会を実現するために重要な要素と考えられる。また、日本はアジアの国々の中で最も高齢化が進み、高齢化社会対応の先進国として認識されており、認知症にやさしいサインの研究は、共通な文化背景や生活様式のある東アジアの国や地域にも応用可能であると期待される。

なお、本研究は経済産業省「認知症共生社会に向けた製品・サービスの効果検証事業」に採択された株式会社メディヴァが実施するテーマ「病院における環境デザイン、ケア、経営の3つの視点による「認知症対応包括プログラム」」のサブテー

図 2 各病棟における認知症入院患者の割合 (%)



出典：厚労省（2018）「平成 30 年度病床機能報告」より筆者作成

マとして実施する。

人の行動を抑制するものと考えられている。

2. 先行研究と事例

ピクトグラムは、意味するものの形状を使って、その意味概念を理解させる記号と定義されている（太田，1995）。

まずは、ピクトグラムに求める役割と機能について整理する。

サインの構成要素としてのピクトグラムは、文字を理解するのが困難な人でも、その形状や図案から意味合いを理解するのに大いに役立つ。

北神（2002）は、ピクトグラムの役割と機能を以下 3 つに分類している。

① 明示機能

事物が何であるかの内容と本質を表す機能であり、ピクトグラムの機能の中で最も中心的なものと述べられている。

② 案内機能

ものや施設などの所在を顕在的に示すことであり、人の行動を案内したり誘導する機能があるとされている。

③ 指示機能

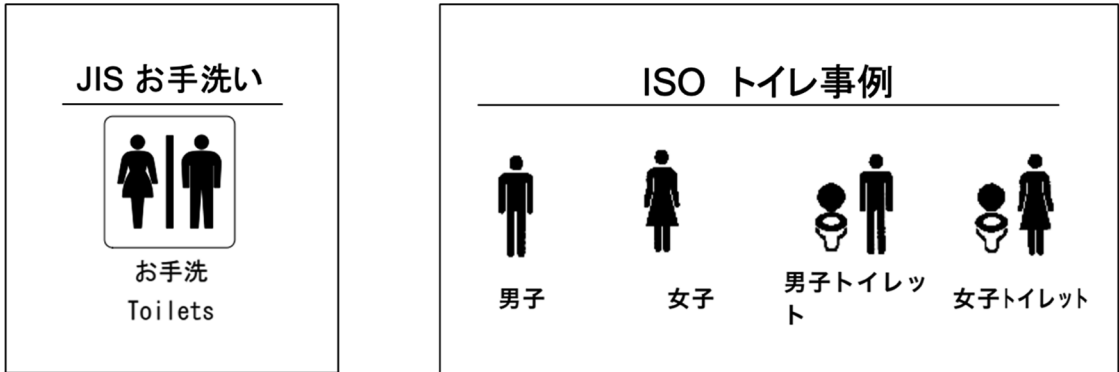
次に、認知症高齢者にやさしいピクトグラムの要件について整理する。

一般的に、ピクトグラムの要件には、代表性、視認性、対象となる人への考慮、審美性、標準化などがある（北神，2002）。

その中で、ピクトグラムの表現に関しては、「代表性」と「対象となる人への配慮」が特に着目すべきである。

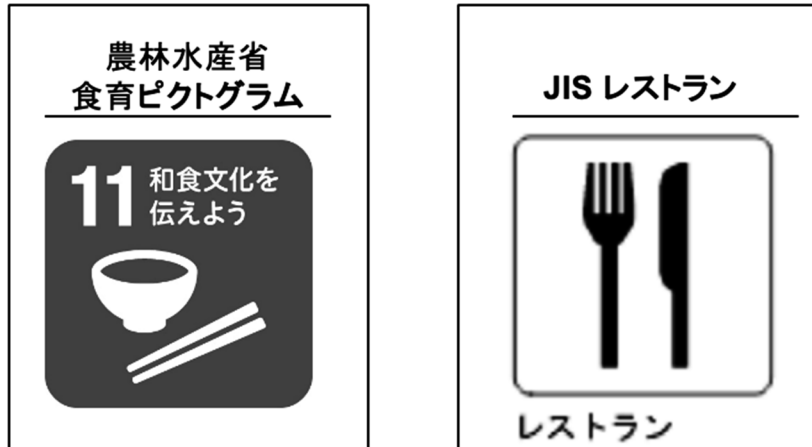
代表性を実現するには、細かな部分を捨て、必要な情報だけに絞って単純化する必要がある。つまり、その意味を本質的に表す情報を整理した上で、必要最低限の表現をすることである。三枝（2007）の研究では、行為を表すピクトグラムで複数のグラフィック要素を混在させると、意味が理解されづらくなる可能性が高いと述べられている。例えば、図 3 に示しているように、トイレの場所を示すサインの多くは、男女のピクトグラムを用いている。ただし、ピクトグラムが表しているのは、あくまでも男性と女性という意味合

図3 トイレのピクトグラムの事例



出典：JIS Z8210

図4 レストランの事例



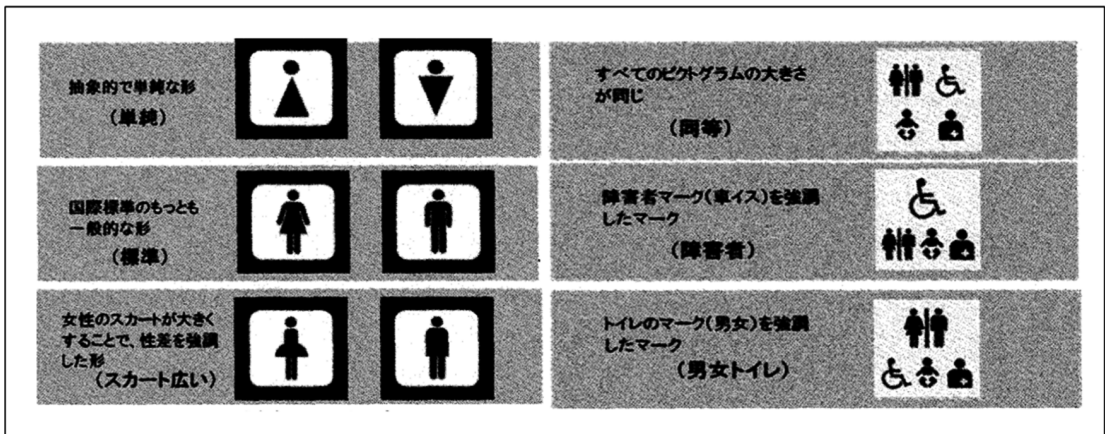
出典：JIS Z8210, 農林水産省食育ピクトグラム

いであり、トイレそのものではない。ISOの事例では、トイレを示す際に、男性と女性の形以外にも、トイレそのもののピクトグラムを加えている。Van Hoof, J (2010) は、サインの構成要素として、文字と同時に、認識しやすいシンボルを使用することで、言葉の意味合いが理解しやすくなると説明している。トイレのサインを例に認識しやすさを比較すると、軽度の認知症の人には男女のシンボルが最もわかりやすかった一方で、中程度の認知症の人には、実物のトイレのシンボルのほうが、トイレの特定に役立つことがわかっ

た。

また、対象となる人への配慮として、生活背景や文化的背景も加味する必要がある。レストランを示す場合、JISとISOともにフォークとナイフをモチーフにしている。現代日本人の食文化には洋食が根ざしているため、フォークとナイフの表現はすぐに食事を連想させ、レストランに結びつく。ただし、現在80歳以上の高齢者を対象とするなら、主流な食事様式はお箸と茶碗を用いるものだろう。どのモチーフがより対象者の文化に密着し、すぐに認知してもらえるかは、対象者の時

図5 ロービジョン者に配慮したクリニックのサイン計画



出典：井上ら（2011）「ロービジョン者に配慮したクリニックのサイン計画—ユニバーサルデザインの考え方」

代や国・地域、生活背景など様々な要素により異なる。

ピクトグラムの標準化は代表的なものとして、JIS（日本工業規格）による案内図記号がある。2002年に既に104項目、交通施設、観光施設、スポーツ施設、商業施設など様々な場所でよく使用されるものがカバーされている。さらに、2020年の東京オリンピックに向けて、外国人でもわかりやすいように2017年に追加・変更が行なわれた。現在、公共・一般施設、交通施設、商業施設、観光・文化・スポーツ施設、安全、禁止、注意、指示、災害など、全239種類が掲載されている。また、ISO（国際標準化機構）は、様々な国や文化における汎用性テストを経てピクトグラムを規定している。JISとISOでは、異なる意向や表現が複数ある。日本において、認知症の人を対象とする際には、いずれのピクトグラムも必ずしも理解しやすいとはいえないだろう。

井上ら（2011）は病院環境の中でピクトグラムを検討している。クリニックのサインを作成するプロセスで、高齢者やロービジョン者にもわかりやすくするため、文字フォント、案内表示、トイ

レピクトグラム、フロアマップについて4回の調査を行なった。クリニック職員220名と緑内障、白内障患者および高齢者91名を調査対象とした結果、男女トイレのサインとしては、スカートの形を広くし性差を強調したものが最も支持された。また、多目的トイレのピクトグラムは、男女トイレを強調したものが最も理解されやすかった。

同じく医療施設で使用するピクトグラムに関する調査として、北神らは診療科ピクトグラム開発に焦点をおいた。病院の診療科（産婦人科、歯科、眼科など）を表すピクトグラムを評価したが、調査対象となったのは大学生の32名（平均年齢19.81歳）であったため、高齢者や認知症の人にも適用できるかは不明である。

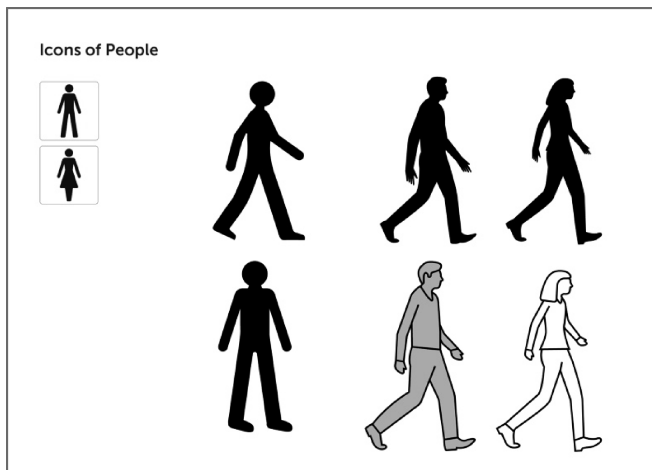
福岡市は、認知症フレンドリーシティプロジェクトで「認知症の人にもやさしいデザインの手引き」を作成し、デザインの一部を堤公民館で試験的に導入した。導入プロセスとして福岡市内の高齢者施設で、認知症高齢者計97名に調査した結果、ピクトグラムの表現要素は「対象物と人の動作の組み合わせ」が最も伝わりやすい結果であった。

図 6 福岡市認知症にもやさしいトイレサイン



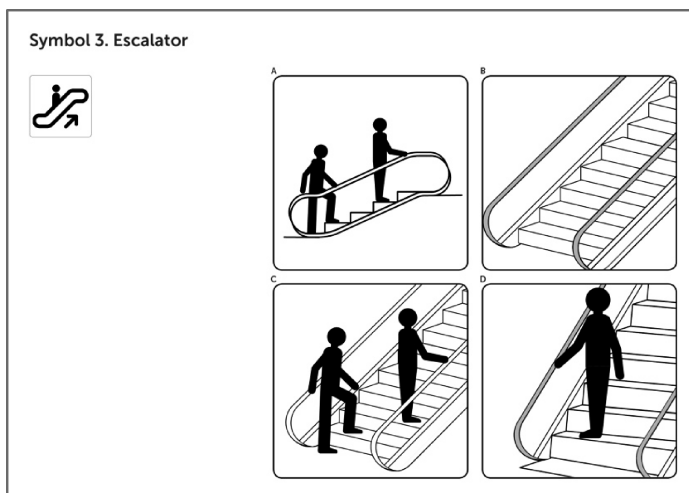
出典：福岡市（2020）「認知症の人にもやさしいデザインの手引き」

図 7 人物の表現



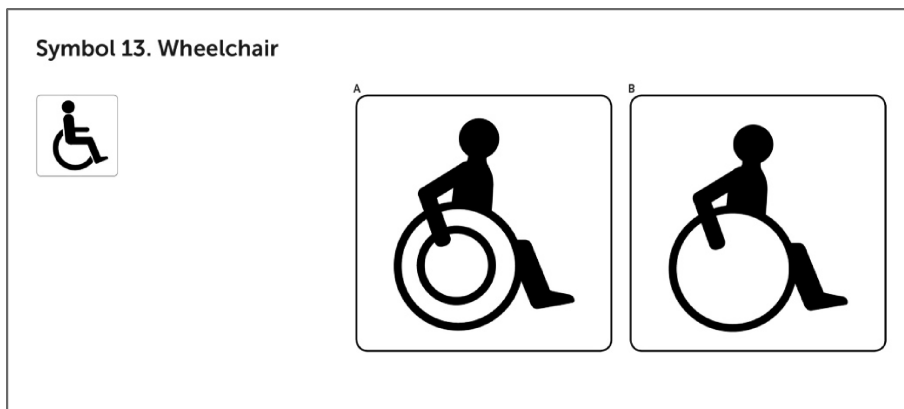
出典：StudioLR（2018）「Inclusive symbols concept design and testing feedback」

図 8 エスカレーターの表現



出典：StudioLR（2018）「Inclusive symbols concept design and testing feedback」

図 9 車椅子の表現



出典：StudioLR (2018) 「Inclusive symbols concept design and testing feedback」

イギリスでは、Studio LR が認知症にやさしいサインの研究と開発に注目している。彼らの研究では、認知症高齢者に対するヒアリングを通し、認識されやすいデザインの特徴を定性的に捉えることができた。彼らの研究によると、以下のようなデザインが認知症の人に好まれる。

人物の表現はシンプルであること（図 7 の左上のように）。

物体の表現は、2D より 3D での表現により、物体間の位置関係がわかること（図 8 の C が最も票を集めた）。

ピクトグラムに求めることは、わかりやすいだけでなく、感情的な面にも注目すべきであること。図 9 のように、左上の表現は誰にとってもわかりやすいが、一部の人は、既存のピクトグラムは車椅子が誰かに押されているように感じ、自分で車椅子をコントロールする A 案のほうが感情的に受け入れやすいと主張した。

以上の国内外の先行研究から、認知症高齢者にやさしいサインの開発においては、以下の要点を踏まえる必要がある。

1. ピクトグラムは、伝えようとする内容において代表性がある。
2. 認知症の人の生活年代背景、文化背景など

を十分に考慮する。

3. 必要な情報にフォーカスするために、デザインルールにおいては、シンプルであり、表現を細かくし過ぎないこと。
4. 複数の物体のモチーフを使用する際、相互の関係性がわかるように 3D を活用する。
5. 人の感情反応にも着目し、不快感や差別的な要素を取り除き、安心感を与えること。

3. 本研究の概要

本研究は、まずピクトグラムの中心機能である明示機能の検証に焦点を当てる。つまり、ピクトグラムの図案は、意図する概念や意味が理解されやすいかを検証することとした。また、一部のピクトグラムについては、概念だけでなく、具体的な場所を理解させられるかどうか案内機能についても検証を行った。

本研究の目的は、使用するピクトグラムを特定することではなく、まずはピクトグラムを作成する際に、留意すべきデザイン原則を抽出することとした。

3.1 研究方法

本研究は、アンケート調査とヒアリング調査を

並行して実施した。

また、認知症高齢者に対するヒアリングを通して、理解しやすい・しにくい理由も探ることとした。

3.2 調査対象者

本調査の対象には、認知症と診断された高齢者および一般高齢者、さらに医療・介護現場の職員も加えている。その理由として、認知症にやさしいサインは、医療機関や介護施設で使用される場合が多いと想定されるため、それらの施設で働く現場職員にとっても理解しやすいデザインである必要がある。

本調査は、茨城県の総合病院 A、東京都にある通所介護事業所 B と高齢者施設 C の協力のもと、認知症高齢者 15 名、一般高齢者 5 名、現場職員 55 名の計 75 名に実施した。なお、ヒアリング対象となる認知症高齢者および一般高齢者の選定については、各施設の担当者が行った。

3.3 調査対象ピクトグラム

病院や高齢者施設で、よく設置される以下の場所を示すピクトグラムの作成を目的に、ピクトグラムの要素を分解し、表 1 要素について調査を実施した。また、調査では、あらかじめ調査対象ピクトグラムと一定の質問票を用意し、大きさの違いや質問内容の違いによって影響が出ないように配慮した。

調査するピクトグラムは図 10 の通りである。

それぞれの選択肢は、物体の 2D と 3D、人物の全身像と半身像、人物と物体の組み合わせについて意識的に作成している。なお、ピクトグラムの作成は、グラフィックデザイナーに依頼した。

4. 調査結果

(1) 男性・女性

男性と女性の区別については、認知症高齢者および一般高齢者が A と B を僅差で選択し、現場スタッフは大部分の人が B を好んでいる。認知症高齢者のコメントから、A を好んでいる理由は以下である。

- ・大きいから
- ・洋服がわかりやすい

B を好んでいる理由は以下である。

- ・見慣れているから
- ・女性の服が見やすい
- ・全体が見えるから

一方、A 案について、男性がサラリーマンであることに違和感を抱くコメントもあった。また、B 案について、「女性はスカートを履いているが、今はスカートを履かない女性も多い」と違和感を感じる人もいた。

(2) スタッフステーション

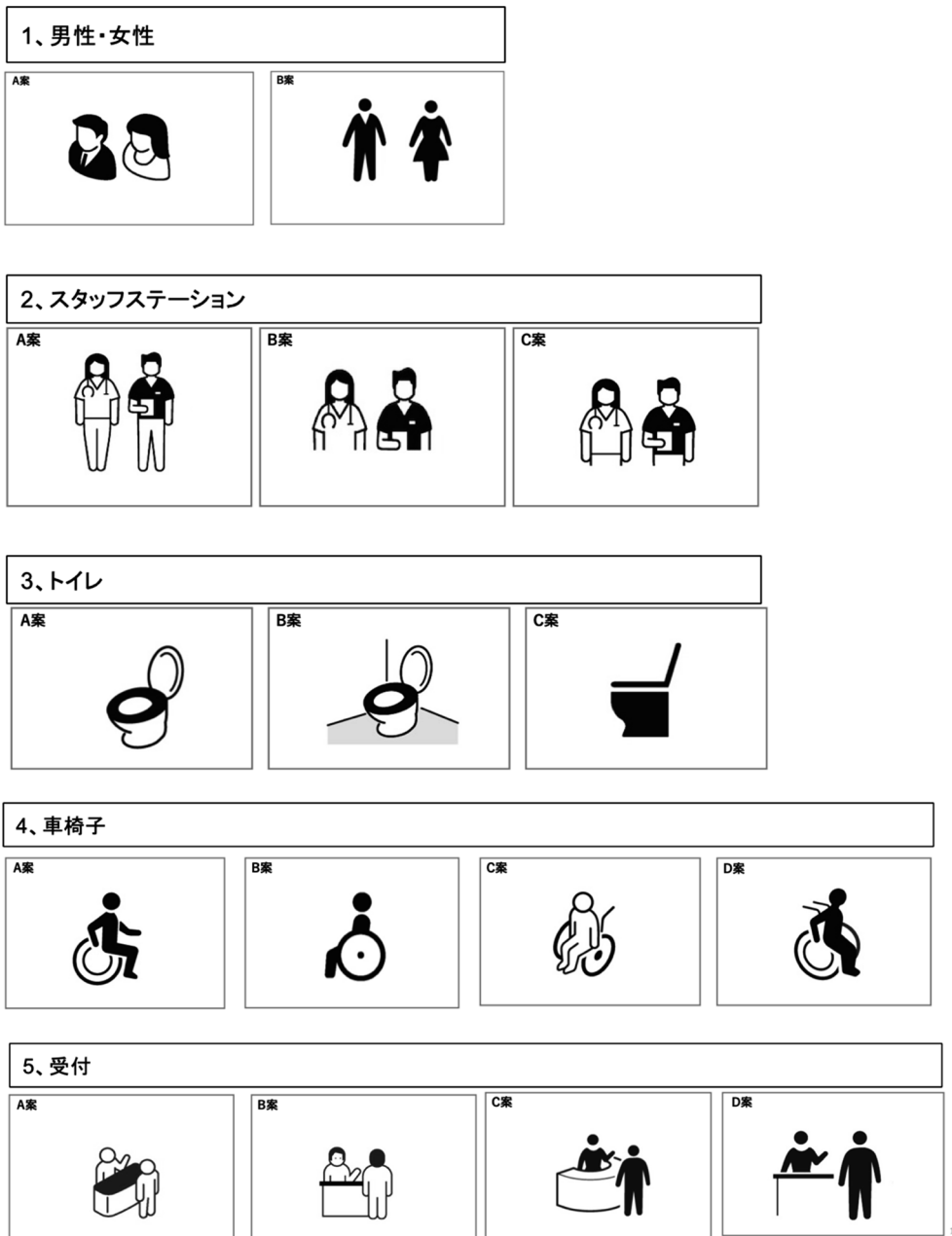
認知症高齢者と一般高齢者は、A 案を最も好んでいる。何の場所を示しているかの質問に対して、「お医者さん、大勢が働いている場所」と答えられる人も複数にいた。ただし、いずれもわかりにくいと答える人からは、以下のコメントも

表 1 調査対象ピクトグラム一覧

目的とする場所	調査となるピクトグラム要素
男性トイレ、女性トイレ	男性、女性、トイレ
バリアフリートイレ	車椅子、トイレ
受付	受付
スタッフステーション	医療スタッフ

出典：筆者作成

図 10 調査ピクトグラム一覧



出典：株式会社メディヴァの委託により作成される

あった。

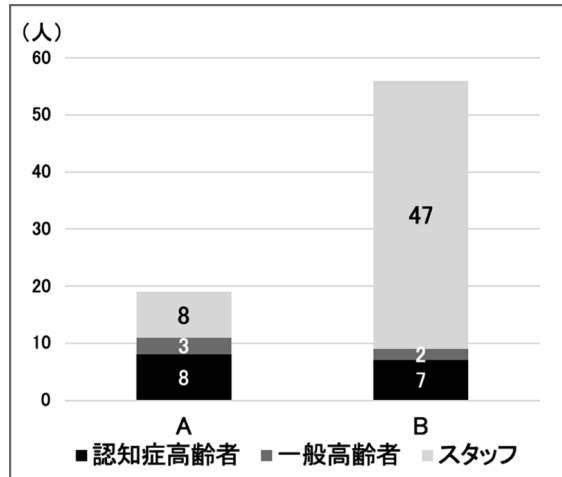
- ・どれもわかりにくい，何を持っているか判別できない
- ・内容が多すぎ，要素がありすぎ，ごちゃご

ちゃしている

- ・男が湯のみでお酒を飲んでいる，女が寄り添って話を聞いている

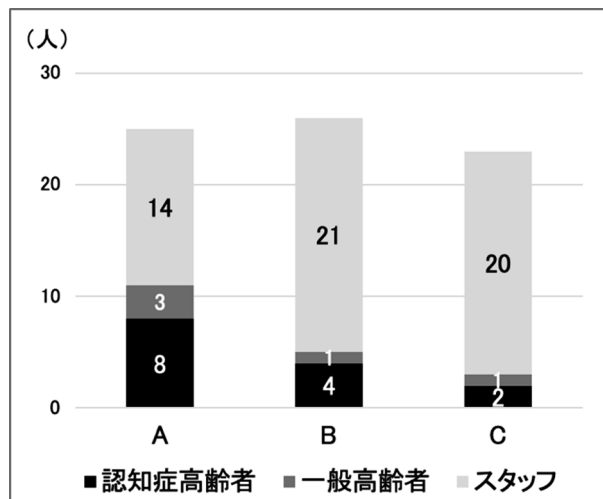
(3) トイレ

図 11 「男性・女性」の調査結果



出典：調査に基づき筆者作成

図 12 「スタッフステーション」の調査結果



出典：調査に基づき筆者作成

トイレについては、認知症高齢者と一般高齢者は、Bを最も好んでいる。その理由としては、以下である。

- ・トイレらしい
- ・部屋の中にあるのはわかりやすい

Cを好む認知症高齢者も複数にいるが、「蓋が開いているから食器、入れ物」というコメントも

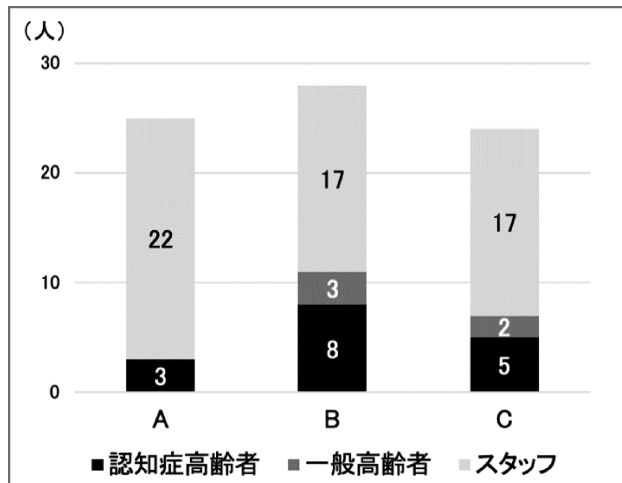
あり、一部の人にとっては誤解を招くこともあった。

(4) 車椅子

車椅子については、認知症高齢者と一般高齢者はB案を好む傾向がある。その理由は以下の通りである。

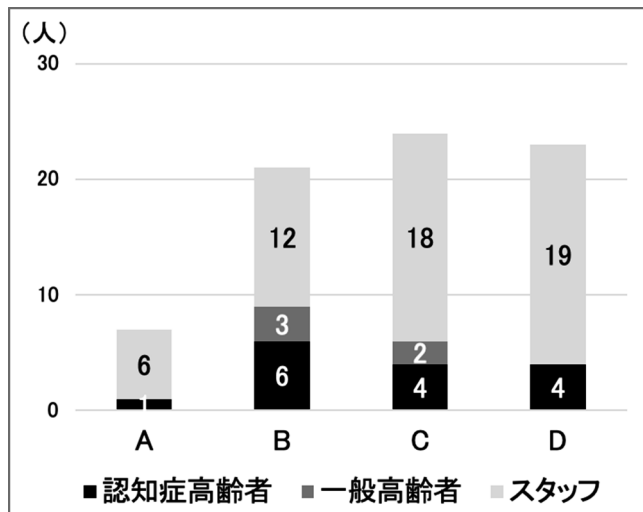
- ・Bが一番シンプル

図13 「トイレ」の調査結果



出典：調査に基づき筆者作成

図14 「車椅子」の調査結果



出典：調査に基づき筆者作成

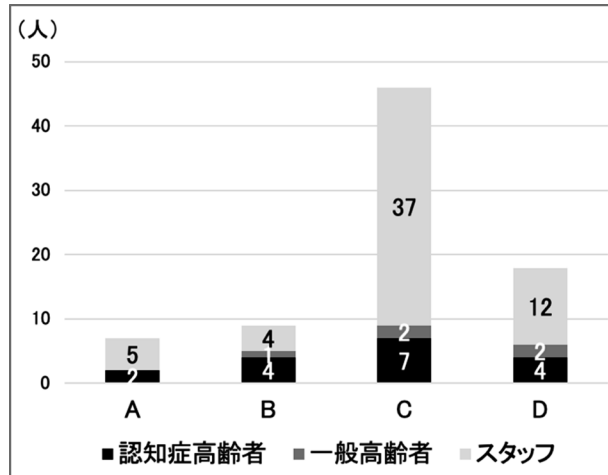
- ・線がはっきりしている
 - ・洗練されている
 - ・ストレートに見て車椅子だとわかる
 - ・Bは乗っている感じがする。他は前に出ている。動いている感じがある。
- ただし、そのほかの選択肢を好むコメントの中

で、以下も参考になる。

- ・取っ手があるので車椅子とわかる
- ・C, Dは人の形がくどいが、車椅子の形は最もわかりやすい

また、A案については、「輪っかを持っているように見える」などのコメントもあった。

図 15 「受付」の調査結果



出典：調査に基づき筆者作成

(5) 受付

受付については、全体的にCに偏っている。認知症高齢者からは以下のコメントがある。

- ・中にいる人と外にいる人がわかる
- ・カウンターが丸くて見やすい
- ・デパートで似たような図案をみたことがある
- ・手の動きもないならもっとシンプル

5. まとめ

本調査は、病院環境でよく使用されるピクトグラム5つを中心に検討を行なった。認知症高齢者や一般高齢者からみて、最もわかりやすい結果以外にも、定性的にその理由を探った。その結果、認知症高齢者および一般高齢者にやさしいピクトグラムのポイントとしては、以下の点がある。

- ① シンプルであり、表現が細かすぎないこと
車椅子や受付の事例からは、情報量をコントロールしシンプルにすることが望ましいとわかった。情報量のコントロールによって、最も特徴的な箇所を目立たせることができ、すぐに直感的に認識させることができる。
- ② 大きく、線がはっきりしている

男性・女性、車椅子の事例からは、構図として中心となる要素を大きくすることが望ましいと判明した。また、線の太さは視認性に影響し、注意力を引くこともできる。

③ 日常的に見慣れていること

男性・女性、受付の事例の事例では、支持される図案のいずれも、他の場所で似たようなサインを見かけていることが強調されている。既に見慣れているピクトグラムは、馴染みがあり、その場所の代表性が強い。この点に関しては対象者の生活環境、年代、文化背景などによって、見慣れるものが異なることに注意が必要だろう。

④ 位置関係がわかること。位置関係をより明確にするために、物体を立体的に見せることが有効である。

受付の事例では、カウンター内の人と外の人をより明確にするために、カウンターを立体的にすることが有効であることが証明された。また、トイレの事例では、床と壁の配置関係を明確にすることで、部屋の中にあることを認識させることができ、トイレの認識に

も繋がっている。

⑤ 洗練され、デザイン性がある

一方、避けるべきポイントについては、以下のような点がある。

- ① 情報量が多い（例えば、医療職の聴診器と温度板）
- ② 他のものに誤解されやすい形状（例えば、トイレと入れ物、車椅子と輪っか）
- ③ 固定概念が強すぎるもの（例えば、男性のネクタイ）
- ④ 感情的に不安があるもの（例えば、車椅子が動いているように見える）

その中で、特筆すべきなのは、情報量のコントロールである。スタッフステーションの例で、図形の要素としての聴診器や温度板などは、認識するのに細部まで見る必要がある。その判断に時間を要する場合もあれば、対象者の生活歴によって、そもそも図案を聴診器に結びつけることが難しいこともある。

以上の結果からわかる認知症にやさしいサインのピクトグラムの要件のうち、「シンプルで、表現が細かすぎない点」、「対象となる人への配慮」、「感情面にも注目すべきこと、審美性」については、先行研究とも一致する。Greshamら（2019）は、サインの重要な要素について、色、コントラスト、物理的な質感、伝達される情報量、サインの位置、目的、高さなどを上げている。絵やシンボルを使用する際に、対象者が馴染んでいるもので表現して「親しみやすさ」を持たせるとともに、対象者の特徴を踏まえたデザインを工夫するなどが強調されている。

また、イギリスの調査事例と比較すると、日本の高齢者が好む図案のほうが、よりシンプルであり、位置関係が明確であれば3Dよりは2Dのほうが親和性がある。また、日本では立体的な案内

が少なく、2Dの方がよく使われるため、「日常的に見慣れている」ことも、大きな要因と考えられる。

そして、認知症当事者の意見からは、「わかりやすい」は重要な要素だが、それ以外の要素の検討も必要であることがわかった。ピクトグラムは、非言語的表現によるコミュニケーションの1つである。そのため、コミュニケーションとして、わかりやすい図案は「伝えたいメッセージ」とすると、不快感のないデザイン性のある「伝え方」が重要であり、ピクトグラムに求められることは、「わかる」だけでなく、「洗練さ・デザイン性」ということも示唆された。

今後、認知症共生社会を実現するには、様々な場所で認知症の人がわかりやすいピクトグラムを使用することが望ましい。商業施設にとっても、認知症にやさしい取り組みをすることのメリットが多くある。イギリスの研究機関 Alzheimer's Society（2018）によると、認知症にやさしい取り組みを実施することで、ビジネスの面においても、差別化ポイントの強化、収入の増加、顧客満足度の向上、社会的責任の遂行による企業イメージの向上などの効果があった。商業施設などの多くの場面で、ピクトグラムに求める機能は視認性以外でも、ブランディングとして使用されることから、ピクトグラムの洗練さと審美性が求められる。そのため、認知症にやさしいサインを普及するために、開発においては洗練さとデザイン性を追求していくことが望ましい。

本研究において、いくつかの制限がある。まずは本研究で取り扱ったピクトグラムの図案そのものについて、代表性を十分に検証し切れていない。5つの意図とする内容を調査対象としたものの、選択肢の候補が少ない。例えば、スタッフステーションについては、いずれも男女の医療従事者に聴診器と温度板を持たせたものとなるが、他

の図案の提示（例えば、ナースキャップなど）が不十分であった。また、調査の方法については、施設職員を経由してヒアリングを行なったことから、認知症高齢者がスタッフの意見に影響され、中立性が保たれていない可能性もある。そして、調査の構築は、代表性の検証（意図する概念の理解度）、案内機能の検証（概念と場所の結び付け）の2段階で、検証できるような設計ができていない。そのため、本調査から結び付いた結論は、あくまでも代表性と視認性を高めるためのものに過ぎない。

本研究は、認知症高齢者に焦点を当て、生の意見からピクトグラムのあり方を整理した。本研究から抽出されたピクトグラムの原則をもとに、実際のピクトグラム開発に応用したり再検証したりしながら、さらに研究を進める必要がある。そして、本研究を通して、当事者からの意見を踏まえた開発が重要であることを再認識したと同時に、今後も開発と研究の繰り返しによって、検証されたピクトグラムを標準化することは、認知症共生社会の構築に不可欠であることを強調したい。

参考文献

- 井上賢治, 間瀬樹省, 桑波田謙 (2011) 「ロービジョン者に配慮したクリニックのサイン計画—ユニバーサルデザインの考え方」
- 厚生労働省 (2018) 「平成 30 年度病床機能報告」
- 三枝孝司 (2007) 「ピクトグラムの形態表現に関する研究：高齢者対象や造形的要素をより考慮した標準案内用図記号案」『九州産業大学芸術学会』
- 小磯明 (2017) 『イギリスの認知症国家戦略』同時代社
- 太田幸夫 (1995) 『ピクトグラムのおはなし』日本規格協会
- 中堀伸枝 (2021) 「日本における認知症の有病率の将来の予測：富山認知症調査の結果」『BMC Geriatrics』
- 日本規格協会 (2019) 「案内用図記号 (JIS Z8210)」
- 福岡市 (2020) 「認知症の人にもやさしいデザインの手引き」
- 北神慎司 (2002) 「ピクトグラム活用の現状と今後の展望—わかりやすいピクトグラム・よいピクトグラムとは？—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』 48
- Alzheimer's Society (2018) : Dementia-friendly retail guide
- Barker, P. and Fraser J. (2000) Sign design guide: a guide to inclusive signage. London: JMU
- Department of Psychology (2012) : Examining the Picture Superiority Effect in Prospective Memory, Including the Factors of Age and Attention Load . PROCEEDINGS of the HUMAN FACTORS and ERGONOMICS SOCIETY 56th ANNUAL MEETING
- Gesine Marquardt, Dr-Ing (2011) Wayfinding for People With Dementia: The Role of Architectural Design : HEALTH ENVIRONMENTS RESEARCH & DESIGN JOURNAL, HERD Vol. 4, No. 2
- ISO (2010) ,The international language of ISO graphical symbols
- Meredith Gresham, Liz Taylor, Sarah Keyes, Heather Wilkinson, Danielle McIntosh and Colm Cunningham (2019) : Developing evaluation of signage for people with dementia. HOUSING, CARE AND SUPPORT, VOL. 22 NO. 3
- Nicole Fink, Meghan Goodwin, Nicholas Jewell, Spencer Kohn, and Richard Pak Clemson University
- StudioLR (2018) 「Inclusive symbols concept design and testing feedback」
- Van Hoof, J. (2010) Ageing-in-place: the integrated design of housing facilities for people with dementia. Eindhoven: Technische

Universiteit Eindhoven

19. World Health Organization (2021) ,Global status report on the public health response to dementia